
気持ち

chikubi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気持ち

【Zコード】

N6154A

【作者名】

chikubu

【あらすじ】

本当に伝えたいことがある。言わないで後悔するより、言って後悔したい。

「…だからあ、あきらめきれないんだよ」

「…だからあ、あきらめきれないんだよ、
ムードのある静かな音楽を遮つて、酔つた男が店主に言葉を投げる。

「俺だつてわかつてゐつもりなんだよ。いつも彼女は自分が店にいるときにしか連絡はよこさないし、プライベートで会う時は全部オレの財布。買い物が終わればすぐ帰るし」

店主は煙草の灰を灰皿におとすと、静かに口を開いた。

「私だつたらすぐに諦めますね。キバクラの女の子じやななければわからないんですけど、話を聞けばどう考へても貢がされてるじゃないですか」

「分かつてゐ…。でも諦めるには金を使いすぎたんだよ…」

店主は、ふうとため息を一つだけ漏らした。

いつも閉店間際に、酔つ払つて自分に愚痴を聞かせにくるこの男を好きになれなかつた。

男は危ない手つきでカウンターのカクテルをぐいっと飲み干すと、倒れ込んで呟やいた。

「水をくれ…」

店主は無言でゾンビグラスに氷を入れ、水道からグラス一杯に水を注ぐと、男の前に静かに置いた。

閉店時間はもう過ぎている。【HIDE】と書かれた看板の下に店はある。小さく、薄汚い外見からは想像できないほど、店内は広く、清潔で、キレイな照明が薄暗い、小洒落たバーと詮つのがぴつたりな雰囲気に仕上がつてゐる。

「…この店はまだ店主、正也がまだ二十歳のころに父から任された

店だ。当時は父に、

「任せると言つても、仕事だけだ。お前には経営するのはまだ無理だろ?」

と言われ、仕事もせずぶらぶらと遊び歩いていた正也からしてみれば、経営はしていなくとも形式上は店長?なんかかっこいいじゃん!とだけしか思わず、もちろん引き受けた。

しかし、二十四歳になつた今は、父はこの店を完全に正也に任せ、父もそれが当然のように店のことは何も言わなくなつた。

正也はそれに苛立つていた。客はそこそこ来る。売り上げも悪くないし、同年代の男達よりは収入もあつた。しかし、父の口先だけの言葉と、全部自分でやらなければならないこの店の経営が、面倒くさいてイヤだった。それでも自分一人しかいないし、やらなければならぬ、と変な責任感から投げ出すことはなかつた。

「告白したほうがいいのかな…」

男が独り言のように呟いた。

正也は呆れた様子で男に見向きもせず、店を閉める準備を始めた。

「おいおい、まだ客がいるだろ? 人が真面目に話しているのにそれはないだろ?」「うー

正也はその言葉にまた苛立つだ。この男は三日前もやはり閉店間際に現れ、同じことを言つていた。いつもいつも閉店間際に現れては同じことを言つて、相談するくせに何か言つとやたら否定する、この男がうつとうしかつた。

「何度も言いますけどね、そんなに言つなら自分の思つてることその娘に全部言えばいいじゃないですか。それでダメなら諦めればいいし」

「ダメでも諦めきれないんだよ。いくら使つたと思つていてるんだ?」

「「」のまま今の状態が続くようだと、もつと使い「」になると思つますけどね」

男は沈黙した。その様子がさらにもつと正也を苛立たせた。

「ち、もう店を閉めますよ」

男はまた来るよ。と、とぼとぼ帰つていった。正也も店閉まつが終わり、もう薄明るい外をぼんやり眺めては、大きくため息をついた。

次の日、正也はいつもとは違う、少し晴れやか気分で昼を迎えた。普段は夕方に起きてそのまま店に行くところだが、昔から仲のいい友人のヒサが、合コンをするからこいよと誘われ、正也の希望で翌日定休日の日にしてほしいと頼んだ。
そして今日がその日だ。

ヒサと待ち合わせの時間が午後4時だったので、ゆっくり昼食をとり、シャワーを浴びた。髪や眉毛を整えると、鏡にはいつもの自分よりずっと清潔な顔が写っている。

正也の顔を見た女性のほとんどが、

「カッコいい!」
「キレイな顔だね」
と、口々に言う。

正也にすればそれは当然嬉しいことで、しかし飾らず、調子に乗るのは痛いな、といつも思っていた。

自分に自信があるわけではなかった。あまり社交的ではないため、初対面の女性にカッコいい人だな、と思われても、口数が少なくて、自分では意識せずとも少しむつとした態度をとることがあり、嫌われてるのか、ノリの悪い人と思われて終わることが多い。

それに比べてヒサは、顔立ちもスッキリしていて、明るく、誰とでも仲良くなれる人懐こい性格で、一緒にいて飽きることはない。店に来るときはいつも違う女性を連れてくるし、彼に泣かされた女性を何人も知っている。

しかし正也はそんなヒサが羨ましかった。誰とでもすぐに打ち解け、悩むことも少なく、いつもケロッとしているヒサに、自分と比べて劣等感を感じていた。

待ち合わせの場所の大きな公園に少し遅れて到着すると、ヒサと、女の子一人が既に楽しそうに話していた。

ヒサが正也に気付き、近づいてきた。

「よし、あの子達が今日遊ぶ子ー真理子ちゃんと美香ちゃんだつたら」

「？」

「どうから引つ張ってきたんだよ…」

面倒くさそうにしながらも、胸は期待で一杯だった。

「俺のバイト先の知り合いの紹介！現役女子大生だつてさー！」

正也との話もそこそこに、女の子たちを手招きし、正也を紹介

した。

「えつと、こいつが俺の友達の正也。正也、真理子ちゃんと美香ちゃんね」

正也は軽く会釈した。女の子達はくすくすと笑った。

真理子は化粧が濃く、香水の匂いをブンブンさせ、金色の髪をくるくると指でいじりながら、やたら高い声でよろしくうへ、と笑つた。一方、美香は、ストレートのセミロングの黒髪を風になびかせ、真理子の隣で正也に会釈を返すと、にこりと微笑んだ。嫌みもなく、大人しい印章をつける。

正也は、真理子のような派手で、今時の若者といった感じの子は苦手だ。その逆に、ヒサは美香のように大人しい感じは苦手で、真理子のような子がタイプらしい。

「とりあえず早いけど、軽く何か食べよう」

ヒサは慣れた口調で皆を喫茶店へ促す。

喫茶店に着くと、決まつていたかのように真理子はヒサの隣に座り、正也と美香を気にもかけずにヒサとはしゃいでいた。それをぼんやりみつめながら、美香と何か喋らないと…。と思い、美香の方を見た。

丁度美香も正也を見た。目が合い、少し照れたように笑うと、「正也君はお仕事何をしていらっしゃるんですか？」

正也は困った。昔なら迷わず、バーで店長やってるよ、と言つただろう。しかし今は、それが嫌らしい気がして、箸に困っていた。
「正也は駅裏通りでバー経営してるんだよーすゞくない？」

ヒサが軽い口調で言つた。途端に真理子が食いつく。

「えへ、すゞおーいーお金持ちなんだねー！バーテンダー？」

正也はたいしたことないよ、と苦笑いしながらもヒサに感謝した。自分から言つより、友達から言つてくれた方が嫌らしくないと思つたからだ。

そして、そう思つ自分で、結局いよいよに見らるたがつていることに嫌気がした。

結局、その日は喫茶店をでたあと、カラオケでヒサと真理子の歌を聞かされたあと、お開きになつた。もちろん、帰る方角が違うはずのヒサと真理子は同じ方角に一人で消えていった。

取り残された美香と正也はどうしようか？と顔を見合わせ、正也は駅まで送るよ、と美香と駅まで歩いた。

美香は、四人の時とは全く違い、色々な話を正也にした。

正也は美香の話すこと全てに頷き、また、返答した。話の内容は他愛のない話だが、最近は店に来る客の相談事ばかり聞いていた正也にとって、それは新鮮だった。

ヒサには女の子と遊ぶとき、何度も誘われたが、皆、真理子のようであつたり、高校生であつたりと、正也にとつてはまともに会話するのも疲れる相手ばかりだった。

美香はそれこそどうでもいい、全く今の状況に関係ない話ばかり

りした。そしてその口調は落ち着いていて、彼女が真理子や同年代の女性より賢いことをうかがうことができた。

正也はいつのまにか美香との会話を楽しんでいた。久しぶりに会話を楽しいと思つた。

駅につき、美香はありがとうございました、と会釈した。正也はどうにも寂しい気持ちになり、自分の名刺を渡した。素直に連絡先を聞けばよかつたのだが、よく考えたらまだあまり親しくないからな、と変な壁を作り、名刺なら嫌らしくない。と一人で解決し、「これ……もしよかつたら。俺の連絡先書いてあるから、いつでも連絡ちようだいね。」

「ぶつきらぼうに渡すと、

「じゃ、またね」

と、後ろを向いて歩き出した。

少し歩いてから振り向くと、彼女の姿はもうなく、電車に乗ろうと速足で人々が改札を抜けていった。

……当然か。とおもいながらも、少し期待していた。もし、振り向いて彼女がいたら……。ここまで考え、正也はまた自分が嫌になつた。

……好きになつたわけでもないだろ?。

自分の住んでいるアパートに着くと、何度も鳴らない携帯電話を見た。そして、淡い期待はぐだかれ、鳴らない携帯を握りながら眠つた。

毎週金曜日起きると、せんやり窓から外を見る。

はつと気が付いたように携帯を見るが、やはり昨日のまま、携帯は沈黙を保っていた。

「オレは寂しがつていいのか？会つたばかりの子とちょっと話が弾んだだけじゃないか？」

煮え切らない自己嫌悪は続き、正也は家を出て店へ向かった。

「そういえば、あれからどうなつた？」

ヒサがにやにや笑いながら、カクテルグラスを片手にカウンターの向こうの正也に問い合わせる。

「どうなつたつて…。あのあと少し喋つて、普通に駅まで送つただけだよ」

「えつ？ 本当か？ 全く…。いつもいつも、お前は真面目すぎないか？」

ヒサの言葉に正也は少し眉をひそめた。ヒサにしては真面目でも、オレはこれが普通のつもりだ。

「そんなだから彼女できないんだよ。いつからいなかつたっけ？」

「いいだろ？ 焦つてつくるものじゃないんだし。」

いつもヒサの誘いにのつて女の子と遊んだあとは、こんな風に二人で話す。それは遊んだ子がかわいかつただとか、ノリがよかつただとか、そんな話だ。

「美香ちゃんだけ？よかつたじょん。顔も綺麗だったし、大人しいから正也好みだと思つたんだけどな」「確かに嫌いじゃないし、ああゆう子はタイプだけど。でもそれだけだよ。」

ヒサはふう、とため息を一つつくと、

「まあ、また何かあつたら呼ぶよ。」

そう残して、帰つていつた。

まだ少し中身の残つているグラスを片付けながら、携帯を気にした。

その日も、携帯は鳴らなかつた。

次の日、正やは携帯の着信音で日が覚めた。はつとして、すぐに画面を見る。ディスプレイには知らない番号。美香かもしぬない。「…もしもし」
少し警戒しながらも、胸は期待で一杯だった。
「あ、もしもし。正也くん？わかる？ゆきだけど…」

ゆきは、正也がまだ高校生の頃、ヒサの紹介で知り合い、はじめて恋愛した相手だ。

当時の正やは恋愛事などはじめてで、ゆきとビニカに行けば必ずお金は自分がだし、荷物持ちも引き受け、ゆきの望みはなんでも聞いた。また、それが当然だと思つていた。

しかし、ゆきはわがままで、最初はそれもかわいいと思つていたが、次第にゆきの「男は女に尽くして当然」な態度に冷めていった。何かを買ってあげたり、ゆきのために何かをしてあげても、それが当然。といった態度が嫌になつて別れた。それからずつと音信

不通で、最後にあったのは成人式以来だつた。

「ゆき？！久しぶりじゃない。どうしたの？なんで番号知ってるの？」

「さつきヒサに会つてさ。正也くん、あのバーでやつてるんだってね。今度飲みに行くよ」

「あ…。うん。待つてるよ」

「…えつと。じゃ…。またね」

予想もしてなかつた人からの突然の電話に何を話せばいいかわからなくなり、何も話せず電話はそれで終わつた。しばらく状況が理解できずにぼんやり外を眺めていた。

その日、珍しく客が来なく、開店から暇をもてあましていた。ゆきからの電話、一体なんなのだろう…。椅子に腰掛けながら考え始めたら、いつのまにかうとうと居眠りを始めていた。

チリン、と入口のドアが動く音が聞こえ、はつと目を覚ました。

「い、いらっしゃいませ」

慌てて立ち上がり、ドアに振り向く。立っていたのは、美香だった。

「あ…」

驚き、何も言えずにいると、美香は照れ臭さそうにはにかみ、軽く会釈した。

「来ちゃいました。」

美香はカウンターに腰掛けながら、またはにかむように笑った。

「あ、ありがとうございました。びっくりしたよ。どうしたの？」

美香は、ふふっと笑い、

「あの時正也さんと話したのが楽しかったから。またお話をしたいなって。」

「本当にまらない」としか喋れないけど、そう言わると嬉しいよ

それから一人はまた、時間を忘れるほど話をした。

「私は、正直男の人とこんなに話すの初めてなんです。あまり接しないし、話しても会話が続かないんですよ」

一息ついて、美香は言った。しかし正也は、真理子のような友達について、そんなことがあるはずないじゃないか。何度も男と遊んだりしたことあるんだろ、と思つた。思いながらも、そうであつて欲しくない、と願い、その矛盾に耐えられなくて聞いた。

「オレも女人の人と話すのは得意じゃないんだ。ほら、ヒサは人懐こいやつだからモテるけど、オレは暗いと思われて、ダメなんだ。真理子ちゃんとはよくああやつて遊ぶんだ？」

あくまでもさりげなく、自然に聞いたつもりだ。
美香は目を伏せ、

「真理子ちゃんとは普段は本当はあまり遊ばないんです。会えば話す程度で。男の人と遊ぶ時に呼ばれたこと、親しい友人からもないんです。なんでのとき私が呼ばれたのか…」

正也は、ああ、ヒサだな。と直感した。おそらくヒサがお節介で色々注文したのだろう。余計なお世話だ、と思いながら、少し感謝した。

「美香ちゃんは、真理子ちゃんとは全然タイプが違うよね」

正也が笑つて言つと、美香はまた、視線を落とした。

「私、真理子ちゃんが羨ましくて。」

「羨ましい？」

「はい。私は真理子ちゃんのように明るいとは言えないし、男の人と何を喋つていいかわからないし。どんな状況でも笑つてて、皆の人気者な真理子ちゃんが羨ましいんです」

「それはオレも同じさ。オレもヒサに、美香ちゃんと同じような感情を持つてる。でもやつぱり性格つて人それぞれだし、美香ちゃんには美香ちゃんなりに、真理子ちゃんが羨ましがるような所が必要あるよ」

「やつですか…？」

「やつだよ。美香ちゃんは充分、魅力的さ。」

自然と出た言葉に、我に返つた。何を言つてゐんだ。

「ふふ、お上手ですね。ありがとうございます。嘘でも、元気がでました」

嘘じゃない、と言いかけて飲み込んだ。この時正やは、この子に恋をしてるのかも知れない。漠然と、なにか不安に駆られた。

「今日はありがとうございました。また来てもいいですか？」

「もちろん。お待ちしています」

美香が代金を払い、軽く会釈して、店を出よつとした。そのとき、妙に寂しさに襲われた。自分はまだ美香の連絡先がわからない。これきりだつたら…

「あの…」

正やは不安から思わず声をかけた。美香が振り返る。

「あの…もしよかつたらメールしよつ」

美香は、一瞬驚き、すぐに笑つた。

「じゃあ家に着いたらメールします」

また軽く会釈し、去つていつた。

正やは顔が緩み、小さくやつた、と呴いた。そして、ああ、オレは美香に恋をしているんだな、と認識した。

正也がまだかまだかと携帯をにぎりしめていた、チリン、ヒドアの開く音がした。

顔を引き締め、

「いらっしゃいませ。」

そこに立っていたのは、ゆきだつた。

「あ……ゆき……」

「久しぶりじゃない、元気にしてた？」

ゆきは、相変わらずそつけない態度と冷たい口調で、せつせ美香が座つていた椅子に腰掛けた。

「今日は意外な人が沢山来るな」

正也は咳き、苦笑した。本音をいうなら、ゆきとはもうあまり関わりたくないかった。正也自身、ゆきとはいい思い出はない。

「迷惑かしら？」

ゆきが目を細めた。今では「いらっしゃった威圧的な仕草一つとっても、正也は苦手だつた。

「いや、久しぶり。会えてうれしいよ」

ゆきはタバコに火をつけると、流れる煙をぼんやりと見つめながら静かに口を開いた。

「ヒサにまたま会つてね。昔話に華が咲いてさ。正也の話題にな

つたり、同じで店をやつてゐた聞いたから

「やつてるだなんて…。ただ、親父におしつけられただけだよ。親父のやつ、オレに店を押し付けて、自分は新しくなにか始めるつて呟つてゐるんだから…」

正也は肩を落としてみせた。しかし、実際はちがつた。経営していくのは面倒だし、休みも少ないが、密とのマリマニケーションや、この店での仕事は、樂しいと云つてよかつた。

「本当に…、迷惑だつたかしら？」

「迷惑なんかしないよ。頼から電話が来たときは少しだけ、驚いたけど」

ゆきはクソクソと笑い、

「ヒサからも聞いていたけど、本当に変わらないわね。まあ、正也くつのやつこいつといふ、嫌いじやないけど」

「やつてゐるの？」

「相手に合わせて、自分を表に出やなこといふの」

正也にはその意味がよくわからなかつた。

それから翌日の同じ出話、別れてからや新しく彼氏が出来たが、別れてしまつたなどと、余話が途切れることはなかつたが、付き合つていたころの思い出話は、したくないと思つていた。

正也は積極的に話はしないものの、たのしげに話すゆきを見守つた。
「…なんか、本当に昔に戻つたみたい」

ゆきは旦頭を指で押さえながら続けた。

「彼氏とね、すぐ別れちゃうのよ。私がわがままだつて。わがまま言つてゐるつもりはないの。ただ、いつでも私に向いていて欲しくて……」

どう声をかけていいかわからず、正也はただ相槌をうつていた。
少しだけ沈黙が続いた。すると、ドアの方でまた、チリンと鳴った。

「いらっしゃいませ」

ようようとおぼつかない足元で、いつもの酔っ払い男が入つて來た。
ゆきはくわえていたタバコを灰皿で揉み消し、ゆっくりと立ち上がつた。

「そろそろ行くわね。今日はありがとう。ごめんなさいね」

いや、こちらこそ、とお礼をいいながら、ドアまで見送つた。

それから一つだけため息をつくと、男の方に振り返つた。
いつものように酔っ払いながら何かぶつぶつ言つている。面倒だし、
できればそのまま放つておきたかったが、そういう訳にもいかず、
渋々声をかけた。

「今日はどうしたんですか？」

「もうダメだ……」

「え？」

「もうダメなんだよ……金を使い過ぎた」

「だったら、プライベートで会つてしまえばこりゃないですか」

「出勤日以外は連絡しないし、しても返りたくないんだよ」

正也はこの男がわからなかつた。

「やつぱつそれ、誰がどう考へても金田的ですよ。あきらめたまつ
がいいです」

「でも好きなんだよー…」

「じゃあ告白でもすればいいじゃないですか？」

「そんなことして、もし断られたらいづつするんだよ…」

男の言葉に苛立つた。うんざりだつた。キャバクラの娘に熱をあげ
るなど、正也には考えられないことだつた。

それから正也は何も言わなかつた。

「今日またこくよ

男は多少すつきりしたのか、起きあがり、しつかりしたあしどりで
去つていつた。

本当におかしな日だ。そう思いながら、いつもよつ少し早めに店を
閉めた。

思い出したように携帯を見ると、メールが一通届いていた。美香か
らだ。

『今日は本当にありがとうございました。また近いうちに行きたい
と思いますケド、お願ひしますー』
正也は返信しなかつた。

「ねえ、今日は泊まつていつてくれるの？」

薄暗い部屋内に甘えるよつとやく真理子の声。その隣にはヒサが横になつてゐる。

「「めん、泊まつはぢょつと…。そろそろ帰らなきや」

いそいそと用意を整え、後ろで何か言つ真理子を無視して部屋を出た。

今まで何人の女性と遊んできたかわからない。だが、そのどの女性とも、体の関係は持たなかつた。

ヒサには亜美といつ名の彼女がいた。もう何年も付き合つていて、同棲もしている。

亜美はヒサが他の女と遊んでいることを知つていた。

「…ただいま」

「おかえり…。今日も遅かつたね…。何してたの？」

「別に…。友達と遊んでた」

「そう…」

亜美には分かつていた。しかし言いだせずにいた。

ヒサにも罪悪感がないわけじゃなかつた。だけどもう亜美とは一緒にいるのが当たり前で、亜美がそのことで悩んでいることもうすつす感づいていたが、別れることはないだらう、と疑われてもしらを切り通していた。

「…いつもどこで遊んでいるの？」

不安そうに亜美がヒサに聞く。

「正也のとことか、バイト先の先輩の家におじゃましたり」

それが嘘だとわからない亜美ではなかつた。

正也の店には、まだ付き合い始めたころに一人で何度も行つた。亜美は正也とも仲がよかつた。

料理人を目指すヒサのバイト先は中華料理の飲食店で、その先輩とは面識があり、ヒサがバイトではない日に、たまたまヒサのバイト先へ行つたとき、最近はヒサがよくお邪魔しています、と挨拶した時に、ヒサとはこのところ全然遊んでない、と言われた。

その時、疑いは確信に変わつていた。

だが亜美はヒサを信じたかつた。

「そつか…。私、今日はもう寝るね」

亜美は後日、正也の店に行くことに決めた。

陽気が温かく、春も目前まで迫るころ、正也は後輩のたつきと、アパートで昼ご飯を食べていた。

「こんな時間からどうしたんだよ…」

まだ少し寝ぼけた顔で、たつきに問う。

「あはは、いやあ、暇だったんで」

たつきはまだあどけない顔つきだが、歳は正也とほぼ一つか違わず、見た目の割に考えもしつかりしている。ヒサ同様、正也とは仲のいい、よき理解者だ。

「どうですか？ 最近はいい子こます？」

正也の頭の中に、美香の顔が浮かんだ。
少し聞をおいて、

「いいや。いないさ」

と答えた。

たつきはこやつと笑つて、

「あ、いるんスね？ 正也さんはわかりやすいなあ。だれですか？」

「んー…。ちよつと気になる人はいるけど…。でもそれだけだよ」

「それだけって…。それで十分つスよーで、アタックしないんスか
？」

「いや…。まだ知り合つたばっかだし…。アタックとか…」

「気になつてるんなら積極的に行くべきですよー待つてたつて寄つ
てくるもんじやないんですからー」

確かに…、と携帯を手にしてみた。

「でもなあ…」

「どうあえず、ホールに誘こましょー。話せやれからッスよー。」

携帯のメールを開く。

しばらく考えてからホールに誘つ文をつむぎ、そして送信した。

匂い飯を片付けていると、すぐに携帯が鳴った。

「返つてきましたよー。どうでした?」

正やは嬉しさをたつきに語りなによつてひびく。

「OKだつて。」

と一言、たつきに返した。なぜかたつきは自分の元のよつて壇んでいた。

しばらくメールのやりとりをして、美香とは次の定休日になつた。

たつきは一人で駅前の喫茶店がお洒落だと、国立大学のとなりの料理屋がおいしいだと色々喋りだした。

「分かつた分かつた。参考にしどくから、どうかいこひぜ」

まだ喋りたりないたつきをいなして、一人は街へ繰り出した。

辺りも薄暗くなり、日が長くなつたことに夏が近いことを感じながら、正やは店へと向かっていた。

「お前も来るのか?」

隣にはたつきが当然、とこつた顔で並んで歩いていた。

「やる」となし。いこじやないつスかあ

けらけりと笑ひ。

店を開け、たつきと二人、のんびりとタバコをふかしていると、ドアがチリン、と鳴った。

「こりつしゃいませ」

そこに立っていたのは、ゆきだった。

「あら、友達？」

ゆきはたつきの方を見ながら、カウンターに腰掛けた。

「仲のいい後輩だよ」

たつきはゆきと正也を交互に見て、誰ですか?と書いたように正也に向かって首をかしげた。

「友達よ、昔の。ね」

ゆきはたつきを見ながら、少しだけ微笑んだ。たつきは少し間をおいて、ゆきに自己紹介した。ゆきもまた、たつきに名を名乗った。

しばらくたつと、一人は酒の力も借りて、完全に打ち解けていた。正也は他のお客や、店の仕事で一人とあまり喋れていなかった。

「ゆきさんは、彼氏とかいるんですか？」

たつきがゆきに問う。

「いないわ。ずいぶん前に別れたもの」

「そうなんだ。じゃあ、好きな人はいるんですか？」
ゆきは一瞬だけ正也を見て、言葉を濁した。

「それより、あなたそんなに飲んで大丈夫なの？」
たつきは少しだけ、ゆきが動搖したように見えた。そしてそれを聞いてはいけない気がした。

「オレは全然大丈夫っス。ゆきさんも、飲みが足りないっすよ」
笑いながらそういうと、自分のウイスキーをゆきに渡した。

店の客も落ち着き、正也が一人のところへ行くには、ゆきは相当酔っていた。

「二人とも、大丈夫か？帰れるか？」

正也が心配そうに聞くと、
「オレが送つてこきます」

たつきが力強く言った。正也はたつきにゆきを任せ、すまない、と言つたにつきに謝った。

「正也さんはなんにも悪くないっスよー。オレが飲ませちゃつたんですけど」

そう笑つて、たつきはゆきの肩を持つて、また来ます、と出でいった。

暗い夜道を醉つたゆきをおぶりながらたつきは歩く。

ゆきは店を出た後、結局歩くことができなかつた。

「「」めんねえ……」

たつきの耳元で囁くように謝る。

「謝りなきやいけないのはオレの方っスよーゆきさんに飲ませたの、オレっすもん」

たつきは申し訳なさそうに笑つた。

「私ね……まだ忘れられないの」

「え……？」

「私と正也、昔付き合つていたの。私がわがままばっかり言つて振り回して。でもいつも受け入れてくれたわ。」

ゆきは酔つた勢いで、たつきに溜まつっていた気持ちをぶつけた。

「別れてから、何人か付き合つた人はいるわ。最初は皆、笑つてそばにいてくれるの。だけど、一緒にいればいるほど、私にはついていけないって……。あはは、私、わがままだから。いつも皆を困らせてたわ。」

たつきは黙つて相槌をうち、静かに聞いていた。

「正也くんは優しかつた。他の誰よりも。でもあの時は、私も何も知らなかつた。今思えば、正也くんは私のわがままをいつでも笑つて受け入れてくれた。でもその時はそれが当たり前だと思っていた。どんなに優しくされても足りなかつた。彼の気持ちはずっと私を見つめてくれたのに、私はそれに気付かなかつた……。久しぶりに会つ

ても、変わつてない正也くんをみたら…

それからゆきは、嗚咽を漏らして静かに泣いた。たつきは正也には気になる人がいるということを言おうとしたが、飲み込み、ゆきの力になつてやめようと心に決めた。

そして、ゆきを送つて家についたとき、湿る肩の服をぎゅっとつかんで、切なさをかみしめていた。

今日は美香とデートの日といつともあり、正也は入念に身だしなみを整えた。服もお気に入りのTシャツに、迷彩のズボンをあわせて、ラフな服装でさつさつと家を出た。

待ち合わせ場所に着くと、美香はもう待っていた。そのかわいらしい後ろ姿は、正也の気分を高揚させた。しかし冷静に、今日は大人の態度でいこう、と声をかけた。

「じめんね、待つた？」

美香は少し驚いてから振り向き、待つてないですよ、と、にっこり微笑んだ。その笑顔がとても愛くるしく、この時正也はああ、オレは美香にひかれているんだな、と、確信した。

「どこに行こうか？」

「私、ゲームセンターに行きたいです

その答に正也はぎょっとした。どこでもいいですよ、と言われるだろうから、彼女の雰囲気を考え、たつきに教えてもらつた洒落た喫茶店でお茶して…。と考えていたのだが、おもいもよらぬ返答に、少し戸惑つた。

「ゲームセンター？」

「はい…。おかしいですか…？」

「い、いや。予想外だつたから少し驚いただけ。おかしくないよ」

正也がそういうと、美香はほつとした表情を見せた。

「私、ゲームセンターに行つたこと、あまりないんです。学校の友達は当たり前のように行くから、何が楽しいのか…」

「任せなさい。オレは昔ゲームセンターで毎日遊んでたほどだからね。面白いものが沢山あるよ」

本当のことだつた。自慢にはならないが、まだ学生の頃、正やは毎日のように友達とゲームセンターにたまつっていた。

当然、ゲームにはひとより詳しいし、クレーンゲームなんてやらせたら、賞品が無くなるまでとり続けるほど、うまかった。

二人は歩いて近くのゲームセンターへ入つた。新しくはないが、二階建てで、充分な広さがある。店内はやたら清潔で明るく、一階にはクレーンゲームやレースゲームにプリクラ機械、リズムゲームが置いてあり、二階はメダルで遊べる競馬やスロットにパチンコなど、さまざまが充実していた。

「わあ。なんだか、想像と全然違いますね！」

美香は、店内の音に負けないように声をはりあげた。

「私、じゅうとひまもつと暗くて、恐い人が沢山いるかと思つてました」

今時の子にしてみれば、考えられないが、彼女にとつてそれは、初めて見る世界なのである」とは、様子をみれば明らかだった。

それから一回りして、一緒にレースゲームをした。正也はレースゲームが得意なのでなんなくゴールしたが、美香はといふと、コースをばずれ、車をぶつけ、終いには逆走する始末だった。リズムゲームもやった。タイミングに合わせて太鼓を叩くだけながら、正也にはからきしで、逆に美香はいつも簡単にやってのけた。

一通り遊び終えると、美香はクレーンゲームのぬいぐるみに目を奪われていた。今人気の、かわいらしい小熊のぬいぐるみだ。

「クレーンゲーム得意なんだ。とつてあげるよ」

そう言つて、百円を入れた。

正也は確かな腕だった。ぬいぐるみに器用に引っ掛け、持ち上げるところよつは、引っ張りこむ要領であつところにとつてしまつた。

「わあ、すごいですね！」

「はい。あげるよ。俺が持つても仕方ないしね

「ありがとうーーのマスクギフト、かわいいですよねー私、好きなんですよ」

彼女は嬉しくてたまらない、といった表情で夢中になつてゐる。その姿を見て、正也はたまらなく愛おしく感じた。

それから少しだけ辺りが暗くなり始めるころ、二人は夕食をたべにレストランに入った。もちろん、たつきからパスタがおいしい、と教わった店もある。

二人は窓際の奥の席に腰掛けた。

「こここのパスタがおいしいみたいだよ」

美香はへえ、と皿を輝かせて、メニューから慎重に選んでいる。

やがてテーブルの上には、皿に綺麗に盛られた一人分の食事が次々に運ばれてきた。

「これはすごいですねーおいしそう…」

想像を超えるほど豪華な食事に驚きを隠せないのは、美香だけではなかつた。正也はこのレストランを知るたつきが少し恨めしかつた。

「オレも初めてなんだけど、まさかここまですこいことはね…」

笑いながら美香の小皿にパスタを盛りつける。

「ありがとうございます」

「え？ いいよいよ、これくらい」

「いえ、今日のことです」

「今日の」と？」

美香に何かお礼を言われるよつない」としたか?と、自問自答をするが、何も思い当たらない。

「今日は本当に楽しかったです。」

「いや、そんなに改まらないでよ。オレもすげく乐しかった」

笑いながらパスタを頬張る。

「おいしいよ! 美香ちゃんも食べなよ」

「…私、久しぶりに男の人といつやつ遊びました」

「うん?」

「前にも彼氏とかはいたんです。だけど、男の人つてやつぱり皆、真理子ちゃんみたいな子が好きなんだろくなつて。浮気ばかりされちゃって。もしかしたら私つて、女としてあまり魅力ないのかなつて思つて。でも、この前正也さんがかわいいつて言つてくれたの、嘘でもすげに嬉しかつたんですよ」

美香は少しだけはにかんで笑つた。

「嘘だなんて…。オレは美香ちゃんの」と、本氣で…」

言いかけて、言えなかつた。

「本當だ、すげくおいしいですね!」

美香は何事もなかつたかのようだし、料理に舌鼓をうつてゐる。その姿をまたかわいらしく思い、言いかけて言えなかつた言葉が頭の中を駆け巡つた。今言えば、自分の中にある不確かなる恋心を伝えることができれば……。

その日は何も言えなかつた。

それ以来、美香は店にもちゃんと来るようになつた。正也が定休日で、美香の予定がないときは、会つて、何をするわけでもなく共に時間をすゝんだ。正也が美香を想う気持ちは余計に大きくなつたし、美香も次第に正也に心を許していつた。

ある日、正也がいつも通りに開店の準備をしていると、ドアがチリン、と鳴った。開店まではまだ30分近くあった。

「すいません、まだ開店まで少し時間が…」

予想もしなかつた客に、目を疑つた。

「あ…。田美ちゃん?」

「うむ。ちよつと話があつて…。お酒を呑むと話しづらさ

ヒサがいないことに、その話がヒサの事だと解るのより、正也ことひて難しいことではなかつた。

亜美をカウンターに坐らせ、おしごりとお茶をだす。

「こちなりで」「めんな。ヒサの」となんだけど…。正直に話してほしいの。ヒサと最近会つてる?」

「ヒサとは」「の前遊んだよ。一緒に飯食つたり
「せつかあ…」

亜美のなかに、正也の返答でヒサが浮氣しているかも知れない疑いは、確実なものになつた。亜美の

「最近」

ところの言葉に対し、正也の

「この前」

といつ言い方は、頻繁には会つていない口ぶりだった。ヒサのいいわけは、聞くたびに正也であつたり、バイト先の先輩だった。もしヒサの言つことが正しければ、正也は
「よく会つてるよ」

と言えばいいわけだし、口裏をあわすにしる、ヒサをかばうにしる、そう言つたほうが亜美をだませるはずだ。

亜美はカウンターのテーブルに大粒の涙をこくつもこぼした。それを見て正也はなんとなく、しまつた、変なことを言つてしまつた、と眉をひそめた。

「ヒサね、浮氣してると思つ。どうしたらいいんだろう…」

正也は胸が締め付けられた。亜美の、

「どうしたらいいのか」

の一言で、亜美がヒサをどれだけ好きなのか痛いほどに伝わつた。それでも、亜美はヒサが好きなのだ。そしてその気持ちの大ささに、正也は切なくなつた。

自分は知っていた。ずいぶん前からヒサが色んな女と遊んでいることを。それをいいこととは思わなくとも、自分も誘つてもらっていたことを喜んでいた。今、亞美の言葉に、今までの自分の行動が愚かしく思え、正也はなにも言つことができなかつた。

「いのんなさい。営業の邪魔ですよね。もう行きます」

立ち去るついで亚美に、罪悪感にかられ後ろから声をかけた。

「どうするんだい？」

「わかりません…。話してみます」

顔は笑つていたが、その表情の奥には、何か強い決意のよつなものを感じた。

陽射しも強くなり、気温も上がつたその日、ゆきはたつきに食事に誘われていた。

これまでたつきには自分の今までや、正也に対する気持ちを色々話したし、たつきもまた、親身になつて聞いてくれた。ゆきにとつてたつきは、よき理解者であり、なんでも話せる相手でもあつた。

小綺麗な居酒屋に一人向かい合い、お酒で軽く乾杯すると、たつきが口を開いた。

「今日はゆきさんにお話があるんです」

その真剣な口ぶりに、料理を食べようとする手が止まる。ゆきは静

かに頷き、次の言葉を待つた。

「正也さんのことなんですか…。俺、ビビつてもやあせんに言えなくて…」

「…？」

「正也さん今、好きな人がいるんです。あのときに言えばよかつたんだけど、酔つてたとはいえるあの時のゆきさんを見たら言えなくて。それから言つタイミング逃しちゃって…」

体がじびれるような感覚にとらわれた。力が抜ける。

「え…？」

「すんません。本当、すんません」

たつきは申し訳なさそうに何度も頭を下げた。

「…いいのよ。別に正也くんに振り向いてもらおうなんて思つてなかつたし。ただ少しだけ、ショックだったかな…」

「…気持ち、伝えてください」

「え…？」

「ゆきさんが正也さんのこと好きなら、気持ちを伝えるべきです。例えダメってわかつても言つべきです。でないと後悔します

「ダメってわかつてること、気持ちを伝えたって惨めなだけよ。もう十分惨めな思いしたわ。だからもうこいつの

たつきせんの言葉に少し声を荒げて言った。

「 ゆきせんはそれでいいんスか？ 悲めとか、そんなことないんだっていいじゃないつスか。好きなら好きでいいべきです。自分に素直になつてください」

「 いあんね、今田は帰るわ」

ゆきはそういつてテーブルに並んだ料理にも手をつけず、まるでたつきから逃げるよつに足早にその場を去つた。

何も言ひことができなかつた。まだ忘れられないとは言つても、正也に好きな人がいようがいまいが自分の気持ちを伝えたつて無駄に決まつてこる。熱くなる田頭をやめようと押さえながら、家にむかつて小走りに去つていつた。

その頃、ヒサは正也の店にいた。ヒサにしては珍しく、酔ひほどの酒を飲んでいた。

亞美がいなくなつて、もう一週間連絡がとれてないない。

「 そんなんに飲んだらかえれなくなるぞ」

正也が心配そうに声をかける。

「 …俺さ、なんかバカだつたな。いて当たり前。っていうか、離れることはないと思ってたんだよ。もし別れたとしてもなんとも思わないんだろうな、って。」

真剣な顔つきで話すヒサを見て、それがすぐに亜美のことだとわかつた。

「こいつからだらけ…。始めは亜美のこと、やめんと思こやつていたのに…。いなくなつて初めて気付くとはよく言つたものだな」

「ヒサがそこまでわかっているなら、行け。亜美ちゃんのとこ」

正也は、普段は決して出さないような強い声をだした。

「もういい加減のかわからんないし、あいつはオレに愛想を尽かしてこるや」

ヒサの態度は正也は苛立たせた。

「だからなんなんだ？自分の正直な気持ちがわかつたんだろう？行けよ。行つて伝える。このままじゃ後悔するぞ」

正也の言葉にヒサは怒りを覚えた。

「お前がわかるのか？アイツはもうこなじし、オレのこと好きなわけでもないだろ？なにもわからなこくせに知つたような口を聞くんじやねえよ！」

初めて、ヒサが正也に向けた怒りだった。しかし正也は、真っ直ぐにヒサを見据えていた。

「わからないから言えるんだ。亜美ちゃんが好きなんだろう？一週間位前、亜美ちゃん店にきたぞ。ヒサのことです。ヒサを信じていた。ヒサがどんな下手ないいわけしてもな。言わないで後悔するより、言つて後悔しないよ」

ヒサの動きが止まった。正也を睨みつけていたその目からは、大粒の涙が頬を伝っていた。

「…行けよ。まだ遅くないだろ?」

ヒサは携帯だけにぎりしめ、その場を立つと、すまない、と言眩き、店を出た。

ヒサは走った。亜美の携帯に電話してもでない。亜美の行きそうな場所や、亜美の友達の家も全部回った。

もし、すでに実家に帰ったのなら手遅れだつた。実家は遠く、このまま連絡がとれなければ一度と会うことはできないだろう。

ヒサは走り続けた。一人で行つた喫茶店や、一人で遊んだゲームセンター。しかし亜美はどこにもいなかつた。ヒサはとぼとぼと、帰路につこうとした。その時に、一つだけ、まだ行つていない場所があつた。初めて一人が出会つた場所。亜美が子供と一緒に遊んでるのを見て、カワイイと思い、ナンパしたあの場所。真ん中に大きな砂場のある公園。

ヒサは、自分が呼吸することすらわからなくなるほど走つた。足が痛い。腕もちぎれそつた。しかし、ヒサは走り続けた。

公園につくと、一つだけしかない街灯が砂場を照らしていた。人影はなかつた。もう遅かったのだろうか。

立ち去ろうとするとき、後ろの方で小さく、ギィッ、と音がした。ヒサがそこに目を向けると、何かが微かに揺れている。それは、公園の隅に一つだけ並んでいる、ブランコだつた。近づくと、誰か人が座つてているように見えた。

「…亜美?」

「…来てくれたんだね」

亜美だった。それが亜美だとわかつた途端に、涙が溢れていた。

「亜美…、『めんな。』『めんな…』

それ以上は言葉にならなかつた。涙と動機で、言葉にあることができなかつた。

「…今日来てくれなかつたら、ヒサのことは諦めて、実家に帰らひつかと思つてたんだよ。でも、来てくれたから。ありがと」

亜美はこりこり笑つてヒサに歩み寄り、その手でヒサの涙を拭つた。その日、月明りが優しく一人を照らす中、ヒサは亜美を抱き寄せ、ひたすらに泣いていた。

正也がドアに目を向けると、ヒサが立っていた。もちろんその隣には、亜美が寄り添っていた。正也はそれを見て、嬉しくなった。

「邪魔だつたかな？」

ヒサがからかひ。亜美がそれを怒ると、ヒサ達は並んでカウンターに座った。

「少しお礼がいいたくてね」

ヒサが笑いながら亜美を見る。正也もそれを断る理由はなかつた。それからは四人で、くだらないことで話をはずませた。しかし、時間がたつにつれて、美香の顔が暗くなる。それを気にしたヒサが、美香に声をかけた。

「美香ちゃん、どうしたの？ 具合いで悪いの？」

美香は、少しだけ間を置いて、

「実は……両親が離婚しちやつて。学校やめて、地元に帰らなきやいけなくなつたんです。急なことど……もう届けはだしたし、今日の深夜バスで行かなくちゃいけないんですよ。」

苦笑いしながら美香は答えた。

正也は何を言つているのかわからなかつた。ショックと動搖で、喋ることができなかつた。ヒサもまた、同じだつた。正也のことは知つていたし、あまりにも急すぎる出来事に、頭がついていかなかつた。

「そつ、か……大変だね」

正也にはそれしか言えなかつた。美香が寂しそうに頷くと、それから沈黙が続いた。

すると、またドアが開いた。正やは、ドアの方すら向くことができなかつた。入ってきた客は、真っ直ぐに正也に向かつてくる。ようやく正也の視界に入つてきたのは、ゆきだつた。それにまた驚き、動きがとれなかつた。

「…私」

ゆきがゆきくつと口を開く。

「私、正也くんが好きよ」

ゆきがそのままで言つた瞬間、美香は立ち上がつた。

「『』みんなさい、私行きますね…」

そういふと、小走りに美香は走り去つて行つた。亜美はそれを追いかけようとしたが、ヒサがそれを制した。正やは美香を田で追つことしかできなかつた。

「たつきくんから聞いたわ。あの子が好きなのね」

正やはドアを見つめたまま、ゆきの問いに何も言えなかつた。

「今更私がこんなこと言つてもあなたは怒るでしょうな。でも伝えなかつた。言わないで後悔するより、言つて後悔したほうがいいもの」

「ゆき…」

正也がゆきを見ると、涙が溜まっているのがわかった。

「オレは…」

正也の答を遮るようになり、ゆきは続けた。

「わかつてゐるわ。何があつたか知らないにせど、追つた方がいいんでしょ？ 行つてあげて」

「でも…」

正也はまだ整理がつかなかつた。

「行けよ」

横から、ヒサが正也に声をかける。

「ゆきの気持ち、わかつてやれよ」

「ヒサ…」

「あの時の言葉、そつくりそのまま返してやるよ。好きなら、行って伝える。ダメでも笑い話くらいにはなる」

正也はヒサの言葉が終わらないといつた、店を飛び出していた。

「私は行くわ。報告したい人がいるから」

ゆきは涙を流さなかった。しっかりと前を向いて、店を出て行った。

残されたヒサと亜美は、《OPEN》とかかれた看板を《CLOSE》にひっくり返して、笑いあつた。

「やつしきの女人、すごかつたね」

「あいつもあいつなりに、悩んだんだろうな。大した奴だ」
ヒサがまた笑うと、亜美は思い出したようにムツとした顔でヒサに言葉を返した。

「なんで美香ちゃんが行っちゃったときに、止めたのよ！私が行つてれば引き止められたかもしれないじゃない」

「正也が行かなきゃ意味がないだろ？おまえを迎えに行つたのが俺じゃなくて正也だったら意味ないだろ？」

ヒサの言葉に、亜美は納得して、なにもいわずになるほど、と笑つた。

ゆきはそのあと、真っ直ぐにたつきのもとに向かつた。たつきの顔を見てゆきは、涙を流して泣いた。たつきは何も言わずに、ゆきの頭を撫でた。

「頑張りましたね」

「あつがとつ…。やっぱダメだつたけど、訴えてよかつた

そういうと、また静かに泣いた。たつきは泣くゆきを抱き寄せ、「オレも伝えなきやいけないことがあるんです。正也さんのこと、

好きってわかつてます。でも、血わせてください。俺、ゆきちゃんのこと好きです」

ゆきは驚き、顔をあげよつとしたが、たつきがゆきを抱く手を強めたため、上げることができなかつた。

「あらがとう……」

たつきに一言だけ返し、また泣いた。たつきも、声は出でずに静かに涙だけ流して泣いた。

正やは店を出ると、すぐにバスター＝ナルに向かつた。向かつていの最中に色んなことが頭の中をぐるぐるまわつていて。初めて美香と会つた時のこと。美香とのデートや、話したこと。ヒサと亜美的こと、ゆきのこと。色んな思いを背負つて、バスター＝ナルに向かつた。

バスター＝ナルにつくと、美香を探した。美香がどのバスに乗るのか、それがどの時間に出るのかわからないので、はじから見て回つた。もしかしたらもう行つてしまつたのかもしない…。

そんな不安がよぎつたその時、今までに乗り込もうとする美香を見つけた。

「美香ちゃん！」

気付くと正やは、周囲を気にすることなく大きな声を出していた。美香はバスの乗り口に立つた所で一瞬足を止め、正也の方へ振り向

いた。正也は美香の元へ走り、息を整える間もなく続けた。

「オレは美香ちゃんが好きだ。ずっと一緒に居たい」

それは不器用な正也の、精一杯の言葉だった。
バスの中から出発のアナウンスが聞こえる。

「ありがとう…」

美香は必死に涙をこらえた。

「俺、待ってるから。ずっと、待ってる」

正也がそういうと、ドアが閉まって、バスは出発した。
正也はしばらく走り去つて行つたバスの後ろ姿を眺め、その場に佇んでいた。

最後の言葉は美香に届いたどうか。

それから一年近く時は流れた。

あれからヒサは亜美と結婚して、もうすぐ子どもも生まれる。前のように店に顔を出すことは少なくなつたが、来れば一人して幸せそうにのろけ話をしてくれる。

あの夜、ヒサと亜美は正也の帰りを待つていた。一人で帰つて来た正也を、ヒサは笑つて励ましてくれた。ヒサの言う通り、あの夜の

出来事は笑い話として今もよく話している。

ゆきは、あれからたつきと付き合っているようだ。たつきはいつでもゆきのそばにいたし、自分のすべてを理解してくれて、受け入れてくれるたつきに、次第に惹かれていたらしい。

正也はとこうと、たまにたつきが遊びに来るものの、ヒサからの遊びの誘いも少なくなったし、毎日同じ日々を繰り返していた。その日も店を開けると、いつの日か来なくなつた、閉店間際に来ていた酔っ払いの客が来た。しかしその日は酔つた様子はなく、きりつとした顔付きでカウンターに座ると、正也の方を真つ直ぐに見て言つた。

「私は妻がいてね。一年くらい前に離婚したんだ。原因はわかるだろ?」

見たことのない真面目な口ぶりだつた。正也は黙つて聞いた。

「私は君に好きなら好きと言え、と言われた。相手は夜の女だつたがね。いろいろ考えたんだが、結局言えなかつた。当たり前だが、結果がこれだ。それならせめて、自分の気持ちを伝えるべきだつたと後悔している。娘にも話したよ。呆れられた。しかしだからこそ、娘には後悔してほしくない。相手が誰であろうと、ね」

正也には意味がわからなかつた。

「私はもう帰るよ。娘を、よろしく頼む」

男はそれ以上は何も言わずに、立ち去つた。

正也には意味がわからなかつた。見たこともない娘を頼まれても困る。

「あら、アーティアがチリン」と鳴った。

「こひっしゃ……」

正也は驚き、それ以上言葉が続かなかった。

「えへへ、正也さんに会いたくて、来ちゃいました。」

そこには格好は違えど、あの時のままの美香が立っていた。正やはその場を動けず、ただ呆然と立ち直った。

「あの時の答え、言えなかつたんで言わせてください。私も、正やさんのことが好きです。ずっと一緒にいたいです」

涙が流れていった。正也は気付くと美香を抱き寄せ、時間も忘れ、ただその温もりを感じていた。

「……あら、一緒にこひっしゃ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6154a/>

気持ち

2011年1月20日03時42分発行